



プロローグ

花が少なくなる冬から早春の時期に可憐な花を咲かせてくれる可愛い妖精クリスマスローズの魅力を心ゆくまで楽しみませんか？

★ クリスマスローズって？

一般にクリスマスローズと呼ばれているヘレボルスとは、ヨーロッパに24種・中国に1種が自生する、キンポウゲ科ヘレボルス属の多年生草本の総称です。本来の「クリスマスローズ」は、ヨーロッパなどでクリスマス頃に白い花を咲かせるニゲルという原種の英名です。これに対し、一般にクリスマスローズと呼ばれている園芸品種のヘレボルス・ハイブリッド(或いはガーデンハイブリッドと呼ぶ)は、キリスト教でいう四旬節(Lent、復活祭の前の40日間・2月後半～3月)の頃に花を咲かせるため、「レンテンローズ」と呼ばれます。クリスマスローズは非常に丈夫な花で、魅力あるガーデニング素材となることでしょう。

★ クリスマスローズの魅力

・ 花の少ない冬の庭を彩る

花の少ない12～4月頃に開花し、和風・洋風の庭にも良く映えます。

・ 花色、花姿が多彩

白～桃・黒色まで、さらに模様が多彩でシングル・セミダブル・ダブルと豊富。

・ 花期が長い

萼片が花弁化しているため、花弁が散ることが無い。切り花やドライフラワーに。

・ 日陰で育つ

半日陰から日陰の場所でも良く育ち、お庭を明るく演出してくれます。

・ 常緑の葉が一年中美しい

花の咲いていない時期でも、美しい葉がグランドカバーとして利用できる。

・ 丈夫で毎年咲く

丈夫な植物で、栽培のポイントをつかめば、容易に栽培が可能です。

栽培方法

★ 育て方(管理方法)

1. 季節ごとの育て方

① 冬～春(12～4月)開花期の管理

強い北風や霜を避け、なるべく日光の当たる場所に置きます。灌水は鉢土の表面が白くなってきたら、天気の良い日の午前中に十分に与えます。開花中のものには追肥として肥料(注1)を与えます。

クリスマスローズは花が終わっても花卉(植物学的には、がく片)が落ちません。種を採る必要がなければ、株元から早めに切り取ったほうが株の為には良いでしょう。切り取った花を切花として楽しむのであれば、42度程度のお湯に花首まで漬け、翌朝まで浸漬し、水揚げします。最近では、押し花の素材として利用される方が増えています。

(注1) この時期の肥料は要素バランスの良い良質の緩効性肥料(60日～90日)を与える。

② 春～夏(5～8月)開花後の管理

直射日光を避け、風通しの良い場所に置きます。直射日光のもとで栽培している場合は50%(7月中旬～9月上旬は70%)程度の遮光をします。灌水は鉢土の表面が白くなってきたら、夕方から夜に十分に与えます。暖地(注2)の場合、この時期に肥料は与えません。高冷地や寒冷地(注2)の場合、7・8月を除き薄い液肥を与えます。

(注2) 暖地⇒関東甲信越・中部・関西・中国・四国・九州の標高500m以下の平坦部

高冷地・寒冷地⇒暖地表記地域の標高500mを超える地域と東北・北海道

*あくまで、おおよその目安です。参考にして下さい。

③ 秋～冬(9～11月)の管理

出来るだけ日光の当たる場所に置きます。灌水は鉢土の表面が白くなってきたら、天気の良い日の午前中に十分に与えます。肥料は良質の緩効性肥料(60～90日)を元肥として与えます。

一般的な管理方法

<植える場所について>

地植え、鉢植えのどちらでも構いません。地植えの場合は株元に雨水がたまらない排水の良い場所に植えてください。半日陰を好みますので、望ましいのは落葉樹の下で、夏は落葉樹の葉が遮光してくれ冬は落葉によって日の当たる場所です。腐葉土や完熟堆肥を土にまき、根が深く入るので十分に耕耘してから植え付けます。寒さが厳しい地方では、冬から早春にかけての開花中は北風を避け、表土が凍るような場所ではマルチングなどをするとよいでしょう。

<鉢について>

鉢植え栽培では根の発育が旺盛なので大きめのスリット入りの深鉢を使います。小さい鉢ですとすぐに根詰まりをおこし生育がとまります。基本的には、1年目の小苗は2.5号(7.5センチ)ロングポット～4号(12センチ)ロングポット、2年目の苗は5号(15センチ)～6号(18センチ)、開花株は6号(18センチ)～10号(30センチ)です。根は水や栄養分を吸収するという役目をしますが、同時に呼吸もしています。根は鉢の中で水と酸素を求めて伸びていきます。鉢穴が下にあると、根はどうしても下へ下へとばかり伸びて、最後にはルーピング現象といって鉢の中でグルグル巻き状態になってしまいます。その為、鉢土中の団粒化構造(水はけ・通気)に気をつけたり、成長したら根ぐされ防止の意味でも植替えをし、根ができるだけ鉢中で伸びやすくします。そういった問題を解消してくれるのが鉢の側面に切れ込みがある鉢(スリット鉢)で、そこから酸素が供給されるので中心部に根を多く作り、細根も発生しやすくなります。スリットによって鉢中の水分を均一化することで、根ぐされも防止できます。結果的に、植替え回数を減らす意味からも大きめのスリット入りの深鉢の使用が効果的です。

<用土について>

排水と通気性の良い用土が基本です。赤玉(中粒)6、有機質培養土3を主体にパーライト(通気性)、ゼオライト(根腐れ防止)、苦土石灰少々等を1割程度混合します。

<灌水(水遣り)について>

地植えの場合は他の草花と同様で、通常の散水程度で構いません。鉢植えの場合は年間を通して表面が乾いたら充分に与えるということが基本です。開花中は水分の蒸散が多くなり、また冬季は乾燥しがちなので、天気の良い日の午前中に鉢底から水が流れ出るくらいに与えます。夏場は日中、鉢の中の水温も上がるので夕方から夜に灌水するようにします。ただし、多湿(いつも湿った状態)は根ぐされ等の病気発生のもとになるので注意します。

<肥料について>

開花前(9～11月)は緩効性肥料(60～90日)を元肥として与えます。開花中(12～3月)は追肥として緩効性肥料(60～90日)を置き肥します。基本的には夏季の6～8月は施肥しません。1年目の小苗は少量の緩効性肥料や油粕を与えます。いづれにしても、肥料を与え過ぎると肥料焼けをおこしま

すので与え過ぎには注意します。

<防虫防除・薬剤散布について>

年間を通し、定期的(1~2回/月)に殺菌剤(ダコニール・ベンレート等)を散布し、立ち枯れ病や灰色かび病から大事な植物を守ってください。最近、べト病が多く発生しています。マイシン系の殺菌剤で防除しましょう。ウイルスの媒介が心配されるアブラムシやハダニの害に注意が必要です。発生前にアセフェート系(オルトラン等)の退避薬剤を散布します。

<葉切り(古葉とり)について>

秋(10月頃)に入り新葉が伸びだしたら、それまでの古い葉や枯れた葉などをハサミで切除します。場合によっては、開花時期までに何枚もの新葉が発生するものもあります。その場合は花芽が伸びだしたら再度、葉切りします。それによって美しい株姿となり、花も徒長せずにコンパクトに咲きます。また、冷涼な気候のヨーロッパで育ったクリスマスローズにとって、高温多湿の日本の梅雨から夏は過ごしにくい季節となります。株の間の風通しを良くするために、春に咲いた花の茎や古い葉を整理することも重要です。伝染性の病気(かび・細菌・ウイルス等)を防ぐ為にも、ハサミは1株ごとに消毒することをおすすめします。簡単に出来る方法は火であぶることです。株元から新しい芽が伸びていない場合や、新芽が少ない場合は古い葉を切り取る必要はありません。

<植替え、株分けについて>

鉢植えの場合は一回り大きな鉢に植替えます。理想としては毎年植替えることをおすすめします。ただし、<鉢について>に記載したスリット鉢を使用する場合は2年ごとでも良いでしょう。宿根草なので毎年そのままの状態でも花を咲かせますが、株が大きくなり過ぎると花つきが悪くなったり花が小さくなったりするので、2~3年に1度は株分けして活性化させます。株を傷めずに分割できる分岐点が必ずあるので、ゆっくりと根をほぐしていきながら分岐点を探してハサミで分けます。3~4芽ずつに割って、半月程は風の当たらない場所で管理します。原則として植替え・株分けは9月中旬~11月頃(遅くとも2月まで)に行います。

育種(交配)の楽しみ方

1. 交配

自然の環境下でも良く結実する花ですが、好きな花同士を人工的に交配することで夢のある新しい花を作り出すこともできます。ただし、なんでもかんでもということではなく、交配する双方の長所を引き出すことを考えた親選びは必要です。受粉親(種親)にする花は、雄しべから花粉が出始める前にあらかじめピンセットやハサミで雄しべを取り除きます。交配するまでの間は茶漉しの袋等を被せて(ホッチキスで確実に止める)、昆虫等による自然受粉を防ぎます。交配は晴れた日の日中を選んで行います。花粉親の花粉を受粉親の柱頭にピンセットや綿棒でこすりつけます。念の為、翌日再度繰り返して行うことで確実に受粉が完了します。交配後、1週間程は再度茶漉しの袋等を被せて自然受粉を防ぎます。その後は一旦茶漉しの袋等を外し、よく日に当てて種の成熟を待ちます。

2. 種の収穫

子房が膨らみ始めたら、茶漉しの袋等を被せて種子の飛散を防ぎます。およそ種の飛散する時期は5月初旬位からです。採取した種をそのまますぐにまく「とりまき」でも発芽(1~3月)しますが、発芽率は若干下がります。そこで、通常は種を保存し「秋まき」をしますが、初心者の方は両方を試してみることをおすすめします。

3. 種の管理(保存)

種子の保存は、水に1~2日間浸した後、1000倍のベンレート剤に1日浸してから、パーライトの細粒をいれた茶漉し袋等で湿潤保存をします。「とりまき」をする場合は4. 種まきに進みます。私の場合は種の入った茶漉しの袋をパーライトの中に潜らせ、湿らせて日陰に置きます。その後は週に1~2回湿らす程度に水をかけて湿潤させます。種は乾燥するとほとんど芽が出なくなりますので注意が必要です。

4. 種まき

もっともベーシックな方法は“採(取)りまき”です。採取した直後に、『秋まき』同様の方法でまきます。

「秋まき」は9月下旬から10月下旬に、素焼きの植木鉢に赤玉((小粒)市販の種まき用土でも可能)のみを使用して、まき(4号鉢なら20粒くらい)1~2センチ程度覆土してから指先で軽く押さえます。鉢は発芽するまで日光や雨が直接当たらない風通しの良い場所に置いて、用土(種)を乾燥させないように管理します。

5. 発芽

種は冬の寒さを経た後に発芽します。一般的には1~3月ですが、地域によって或いは管理環境によって変わってきます。日中は日の当たる場所に置き、夜は凍結するのを避けてください。もし、発芽し

なかつたり発芽率が低い場合は、もう1年同様に管理すれば翌年には発芽します。種まきの時にラベルに種の数を書いておけば、発芽しなかった種の数わかりますので、移植の時に種を取り出して再度まきます。8割程が発芽したら、規定より薄めた(通常の4倍程度)液肥を5月下旬までは月に2・3回与えるのも効果的です。

6. 移植

3～6月には本葉も出揃いますので、1本ずつ3号鉢(前述のスリット鉢・プラ鉢・ビニールポット)へ移植します。用土は前述の基本用土で良いでしょう。移植後は水をたっぷりと与え、風通しの良い場所で管理します。根が活着するまでの約2週間は肥料を与えません。夏の間の管理は1. 季節ごとの育て方を参照してください。秋(10月頃)に入り新葉が伸びだしたら、一回り大きな鉢(4～5号)に鉢上げすることで、その後の成長度合いが変わってきます。早ければ、発芽後2年で花を咲かせます。以上は一般的な栽培方法です。

それぞれがお住みの地域によって自然環境の違いもあるので、経験者の方・慣れてきた方はご自分だけの方法でクリスマスローズ・ライフをお楽しみください。

参考文献: 夢花人Homepage

文責: 浅間クリスマスローズガーデン

最上 友行